

開業前夜

1

休憩室の扉が二度ノックされ、緊張した面持ちの男が一人、中に入ってきた。

新しい特急が来る。その事自体は事前に知らされていたが、どんな人なのか、何処を走るかまでは聞かされていなかった。分かっているのは、雷鳥と、その横にいるしらすぎのどちらとも重複しない路線だということだ。

「初めまして、はくたかです。宜しくお願いします」

目の前に立った男は、そう言つて握手を求めてきた。言われるがままに手を差し出すと、儂げな印象を与えるその男は、思った以上の力で雷鳥の手をぎゅつと握つた。だてに特急として選ばれたわけではないと、暗にそう言われている気がして、雷鳥はハツとする。

はくたか、という名前に聞き覚えはあつた。確か、この金沢から上野までを結ぶ気動車特急の名だ。一日一往復しか設定されていないため、顔を合わせる機会も稀だつた。それに彼は同じ方面を走っている急行と仲が良かったはずだ。

彼の後継者として来たのだろうか。

「俺は雷鳥。一応このリーダーをやつてる。運転区間は富山から大阪までだ」

「私はしらさぎ。雷鳥とは同期だよ。何か困つたことがあつたらいつでも言つてね。こいつ、そういつた事には極端に鈍いから、多分気付かないと思うし」

一言多いと言つてしらさぎを睨むと、あはは、と笑つて返された。そんな二人のやり取りを見て、ようやく目の前の男——はくたかは表情を崩し、ふつと吹き出す。

「お二人のような方が先輩で良かったです」

そう言われて、雷鳥は何だか胸の辺りが暖かくなつた気がした。運転開始してから今まで、しらさぎと二人でがむしやらにやつて来たけれど、こうして電車特急として新しい仲間が加わるのは初めてだつたし、これまで一番下つ端であつたが故に、先輩という響きもどこかくすぐつたい。

「気動車のはくたか先輩の後継者として来ました。しばらくは見習いということ、はくたか先輩に付いて勉強させていただきます。実際の業務に就くのは、試験に合格してからになります」

「分かつた。これからいろいろと大変だと思ふけど、一緒に頑張ろう」

はい、と嬉しそうに頷くはくたかに、ああ、と雷鳥が続ける。

「その敬語止めてくれないか？ 何か変な感じがするし……そういうの、向いてないからさ」

「え？」

それまで穏やかな笑顔を浮かべていたはくたかの顔が強張った。突然敬語をやめろと言われて、明らかに動揺していることが分かる。

国鉄は上下関係に厳しい。年など関係なく、立場が上の者には敬語を使うし、下の者にはそれ相応の態度を求める。雷鳥もしらさぎも、それはこの数年の間に嫌になるほど実感している。

しかし、雷鳥が欲しかったのは後輩ではなく、仲間だった。ここで先輩後輩の関係を認めてしまえば、この先ずつとはくたかは雷鳥としらさぎを「先輩」と呼ぶだろうし、今後新しい特急が増えたときもそれは変わらないだろう。

雷鳥がしらさぎの方を見れば、しらさぎも分かったと頷き、雷鳥の言葉を受けて続ける。こんな所は頼りになる同期だといつも思う。

「私も同意。これから長い付き合いになるだろうし、堅苦しく仕事をしたくはないからさ。上は割とそういうことに厳しいみたいだけど、私たちは気にしないよ」

「でも、いきなり止めろと言われても、その」
真面目そうなのはくたかには難しい要求だったか。未だ動揺から抜け出せていないはくたかに、しらさぎは笑いながら、

「いきなりで難しいことは分かてるよ。追々でいいから。でも覚えておいてね」
更にそう言われて、はくたかは頷くしかなかったのだろう。渋々ながら、首を縦に振った。

その後しばらく雑談をしていると、はくたかの上司という人が迎えに来た。これから他の部署へも挨拶回りに行くのだと言つて、はくたかに手招きをする。

はくたかは少々残念そうな顔をしたが、上司の言葉に従い、二人に礼をしてから休憩室を出て行った。

短い顔合わせが終わり、二人残された雷鳥としらさぎは、休憩室に置かれたソファアールにどさり、と腰を下ろした。はくたかが来たときからずっと立ちっぱなしだったのだ。

「いい人そうじゃない」

「そうだな。真面目そうだったな」

「真面目な事は良いことだよ。でも、柔軟性があるかどうかはちよつと分からなかつたな。この仕事つて臨機応変に動かないときつい所があるから」

しらさぎが言うことに雷鳥も頷く。毎日同じダイヤで走つていても、昨日と同じ日など一日もないのがこの仕事だった。

乗客も違えば使う車両も違う。天気も違うし周りの状況も違う。だから、毎朝「今日は何か変わったことが起きませんように」と祈つてしまう癖がついていた。

それくらい、毎日何処かで小さなトラブルや遅延が起きて、それにどう対処していくかのスキルが問われるのだ。慣れないうちにはきつい仕事になるだろう。

「でも、きつと頑張ってくれるよ。まずは試験に合格出来るよう、勉強を手伝ってあげないとね」

「そうだな。お互い時間があるときは様子を伺うようにしよう。試験勉強も頑張ってもらわなければならぬしな」

「了解」

次の列車がもうすぐだというしらさぎは、雷鳥より先に休憩室を出て行った。一人残された雷鳥は、時計を見て自分の次の乗務予定を確認する。今は一日三往復だが、半年後に控えた次のダイヤ改正で四往復になることが既に決定していた。順当に行けば、はくたかが運転開始するのと同じタイミングだった。

同じ電車特急の仲間が出来ることが嬉しい。まだ北陸本線は電化されたばかりで、中距離から長距離を走る電車はそう多くないが、これから北陸を走る特急が増えて、それぞれの本数も増えて、より多くの人に利用してもらえようになればいい。その為には、はくたかも皆から必要とされる特急になって欲しい。雷鳥はそう思っていた。

白を名にもつものたちの寓話

初めてその姿を見たのは、まだ初夏の頃。

新緑の中、爽やかな風を受けながら走る姿を見て、いつの間にか心を奪われていたのかも
しれない。

プロローグ

暑い太陽が照りつける直江津駅。ホームに立つ半袖のシャツを着た若い駅員が帽子を被り
直すのを見た。

もうすぐここに特急がやって来る。ちらりと手にした懐中時計に目を落とし、定刻通りで
あることを確認した白山は、ひっそりと満足げに頷いた。今日もあの人は大丈夫だ、と。

ホームの一番端に置かれたベンチに腰掛けて、白山はいつもと同じように彼を待ってい
た。ホームの屋根が直射日光から守ってはくれるけれど、吹き込む熱風には敵わない。汗だ

くになつた身体をハンカチで拭つて、その時を待つ。

ふわつと風が吹いた。それは熱風ではなく、どこか冷たい山の空気を含んでいる気がする。はつとして風の吹いてきた方向を見ると、敷かれたレールの向こう側に、その人の姿が見えた。

続いて車輪がレールの上を転がる音が聞こえて、電車がホームに滑り込んでくる。白山の目の前を颯爽と先頭車が通過していく。一瞬目が合つた気がしたが、多分気のせいだろう。世の中そんな上手く出来てはいない。

「直江津、直江津です。信越本線は乗り換えです。次の電車は二番線から……」

電車のドアが開くと同時に、大勢の客が降りてくる。それらの邪魔にならないよう、白山はひっそりと身体を柱の影に寄せて、じつと先頭車を見ていた。今いる場所が後尾車両のすぐ近くだから、かなり離れているのだが、敢えてそうしている。彼の仕事の邪魔はしたくなかつたから。

「一番線より、特急はくたか、発車します。お見送りのお客様はドアから離れてお待ち下さい」

甲高いベルの音と、駅員が吹く笛の音が入り交じり、それに合わせるように扉が閉まつた。気の抜けたような音がして、電車は再びゆつくりと動き出す。見る間に遠ざかつていくはくたかを見送りながら、白山はほつと溜息を一つ吐き出した。

今日も元氣そうだ。遅延もなく、きつちりと自分の役目をこなしている。こうして時々見

に来たことで、彼がいかに真面目な特急かということが分かった。

一度だつて話したこともないのに、好きだと思ふのはおかしいとエフに言われたことを思い出す。白山だつて分かつていた。最初はただの興味だったのに、いつの間にか彼に心奪われていた自分が滑稽だということくらいは。

しかし、今焦らなくても、機会はそのうちやつて来るのだと知っているから、敢えて行動に出ないだけだ。今受けている運転訓練が終われば白山は金沢運転所に異動になり、特急「白山」として走り始めるのだから。ルートは違えど、同じ金沢と上野間を結ぶはくたかとは話す機会くらいあるだろう。

信越線への道を歩いていると、先ほどホームにいた駅員が声を掛けてきた。

「今日はお帰りですか」

「ええ。はくたかを見送りましたから」

「よほど好きなんですね」

駅員の言葉に、にこりと笑つて、何の躊躇いもなく肯定の答えを返す。この気持ちを偽ることとはとづくに止めていた。

お気をつけて、という労いの言葉を背に受けて、白山は今の自分がいるべき場所へと戻っていく。ここから遠く離れた、信越本線にある難所、碓氷峠へ。

無事試験に合格した白山が初めて辿り着いた金沢は、これまで訓練をしながら過ごしていた横川とは全く違う雰囲気で、改めて知らないところに来たのだという気分にはせられた。

気を引き締めて、事務所の扉を引くと、暖かい空気に混ざったストーブの独特の匂いが鼻を掠めた。

信越本線線路を走る列車である「白山」を、特急列車にする事を推し進めていたという上司が白山を出迎えた。その人に大まかな説明を受け、各箇所を案内されながら、この人が自分の上司になるのかと思うと内心溜息が出た。とてもではないが好きになれそうにもない。こちらを品定めするような視線、言葉の端々から滲む恩着せがましきなど、全てが鼻について仕方がない。

一通り建物の中を見て回って、上の人たちが詰める部屋に連れてこられた。少し待っている、なさい、という言葉に素直に従い、硬いソファに座っていると、

「君の教育係を一人準備した。細かいところは彼に訊いてくれ」
と言われた。そしてその教育係がもうすぐここに来るのだ、とも。

あの夏を忘れない

1978 / 5

五月の大型連休を無事に乗り切り、車内の混雑もようやく落ち着き始めていた。

雪も殆ど溶けて新緑が芽吹く季節。爽やかな風を全身に受けながら信越本線を走り抜けながら、長く厳しかった冬を思い起こしていた。

雪深い信越本線では、それなりに整備された白山であっても予想外のアクシデントが起こっていた。モーターの故障、線路が埋もれてしまったり——事前にラッセル車が除雪していても、間を置かず降りしきる雪の中では為す術がない——そして問題が発生する度に信越本線を管理している新潟局や長野局、所属する金沢局や運転所、そして乗客に迷惑を掛けることになってしまう事が白山には何より辛かった。

こんな過酷な道を走らなくても、と降りしきる雪を前にして何度思ったか知れない。しかし、停車する度に降り降りする乗客を見ると、自然と勇気が沸いてきて、頑張ろうと思うのだった。

それに、自分とルートは違えども、同じ雪国を通り抜けて東京と金沢を結んでいるはくた

かの事を思えば、自分一人が弱音を吐くわけには行かない、と思う。既に三往復設定されている白山と違い、未だ一往復しかないはくたかは、一緒に碓氷峠を上り下りするエフのような存在がいるわけでもなく、ただ一人でこの白い世界で頑張っているのだ。それでも決してはくたかは弱音を吐かない。いくら辛いことがあっても、ぐつと自分の胸の内に溜めたまま消化してしまう。そんな人だった。

だから余計に心配になるのだが、はくたかにそんなことを言えばあつさり笑つて「大丈夫だよ」と言われて終わりだ。せつかく気持ちを通じ合つたというのに、未だに白山の事を頼ろうとはしてくれないはくたかを思つて、白山は溜息を一つ吐いた。

「よう、今日も浮かない顔してんな」

横川駅に到着すると、既にエフがホームで待つていた。車両を連結させながら、まあね、と白山は苦笑する。

「せつかく気持ちを通じたつていうのに、何がそんなに不満なんだよ」

はくたかとの事を知る唯一の人物であるエフは、白山にとつてかけがえのない親友であると共に、唯一の相談相手というか、愚痴をこぼせる相手だった。金沢では常に気を張つていなければならぬから、この碓氷峠越えが白山にとつて大変ながらも数少ない息抜きの場となつていた。

「不満つていうか……僕つて、あの人の中でずっと後輩扱いなんだなつて思つてさ……」

車両が繋がった後もあちこちと点検しているエフの後ろで、白山は言葉を続ける。

「そりや仕方ないだろ。後輩な事には変わりないんだから。生まれた年は変えられないさ」
さあつと二人の間を冷たい風が吹き抜けていく。否、冷たいと言つても冬のそれとは違う、ひやりとした高原の風だ。この季節の太陽の光は地面を温めてはくれるけれど、まだ風まで温めるほどの力は持っていない。

吹き抜ける風にネクタイと制服の裾をはためかせながら、白山は口を尖らせる。そんな白山の事を気にも止めず、よし、と点検を終えたらしいエフは、ホームの端——今、白山が立っている場所のすぐ近く——に設置してある灰皿の横に立つと、胸ポケットからシガレットケースを取り出し、白い煙草を一本くわえて火を点けた。深く深く吸い込んで、白煙を細く吐き出す様は、自分には真似できないなあと白山は思う。

例えば、自分もエフの様にもう少し男らしければ、はくたかも自分の事を頼ってくれるだろうか、等と余計な事まで考えてしまう。

「でも、もう少し頼つてくれてもいいと思うんだよ。どう思う？」

「俺は後輩つてのがないから分らんけど……先輩だったら、後輩には弱いところ見せたくないもんじゃないのか？ 大体お前ならどうよ」

煙草を灰皿に押しつけて消すと、エフは白山の方を見た。

「僕？ うーん……そう言われれば、そうかな」

「だろ？ ならお前が我慢するしかねえよ」

まだすつきりしない白山に、腕時計を見たエフが「無駄話は終わりだな」と言う。慌てて懐中時計を見れば、確かに出発時間が迫っていた。

「まあ、運転が疎かにならない程度に考えな」

「うん。有り難う、エフ」

そう言ってお互い自分の車両に乗り込む。エフの力強いモーター音がここまで響いてくるのを聞いてみると、昔ここで散々訓練したときのことか蘇ってくる。あの時は目の前が真っ白になるほど雪が降っていた。さすがにこの季節ともなれば雪は消えて久しく、ごく稀に日の当たらない場所に白い名残が残っている程度だ。

「行くぞ」

がくん、とエフに押し上げられる衝撃に身体を揺らしながら、急勾配を上がっていく。本当の春はまだ先なのかも知れない、と思いつながら。

黄昏の見える街

1

「はくたかと白山は車両を共用とする」

新しくやつてきた上司から告げられた言葉に、はくたかも白山も目を丸くした。

「あの、それはどういう」

「今まで向日町の485系で運転していたはくたかを、金沢の489系に置き換えるんだ。経路は違うが発着駅は同じなのだから不都合はないだろう？」

白山は頷きながらも、ちらりと隣に立つはくたかの方を見た。今までと同じ車両を使う白山と違い、はくたかはしばらくの間慣れない車両を使うことになる。それも、今までより本数が増えるという変化に加えて、だ。

しかしはくたかは落ち着いた表情で、首を縦に一度だけ動かした。その動作で了承の意を示すのはくたかに上司は満足げに頷いて、下がりなさいと言った。深々と一礼した二人は、その部屋を後にする。

「先輩、良かったんですか」

「何が？」

上司の部屋からの帰り道、並んで歩きながら白山ははくたかに訊いてみた。しかしはくたかは何を訊かれているのか分からない、と首を傾げて白山の方を見る。

「車両の事です」

「ああ……別に私は構わないよ。走れるのであれば、車両は何だつていいんだ。乗客を乗せて走る事が私たちの仕事だから」

そう言いながらも、微かにはくたかの肩が震えているように見えたのは、決して白山の目の錯覚ではない筈だ。長い間一往復だった所がこの秋によくやく二往復になる事に加えて、急な車両変更の通達に戸惑わない方がおかしい。

白山ははくたかの手を取るときゆつと握りしめた。冷たく細い手が驚いたのかビクリと震える。

「白山」

窺めるような低い声ではくたかに名を呼ばれた。が、握られた手を強引に解くことはしない。あくまで白山の意志でもって手を離させようとするのがはくたかのやりかただった。

「誰も見ていませんよ」

「でも、いつ誰が来るか分からないじゃないか」

白山が手を離す気配が無いので、仕方なく自分から逃れようとはくたかは指を動かす。し

かし白山は動く指に更に深く自分の指を絡めて、離すどころかもつと強く手を握り返した。はくたかが自分の元から逃げていかないように、と。ようやく手に入れたこの人を二度と手放すつもりはない。

「後で、部屋に行くから」

ね、と白山を宥めるように言うはくたかが可愛い、と思う。が、年上で先輩であるこの人にそんなことを言えば怒るかもしれないから黙っておくことにした。あまりに困ったというように眉の根を寄せながら、手を離してくれと頼むので、これ以上我が儘を貫くのは難しいと判断した白山は、名残惜しげにその手を離した。

「約束ですよ。絶対ですよ。今日は雷鳥先輩に誘われても飲みに行ったりしないでくださいよ？」

「分かっているよ。もう……」

白山が離れた手をそつともう片方の手で包み込むようにして、はくたかは白山を睨んだ。が、その目には怒りなど微塵も浮かんではいない。むしろ我が儘を言う後輩を宥めるような、そんな優しい視線に白山は自分が嫌われていない事を実感する。

「それじゃ、また後で」

そう言つてはくたかは先に行つてしまった。遠ざかつていく姿に一抹の不安を覚えながらも、その不安がどこから来るのか、白山には分からなかった。ただ先に仕事に向かっただけ

の事なのに、いつか本当にこんな風にしてはくたかに置いて行かれてしまうのではないかと、思わずにいらなくなる事が時々あった。

風の噂で聞いた、新幹線の建設の話。首都圏と新潟を結ぶというそれは、今の上越線とほぼ同じルートを走るという。工事が難航している所為で未だ完成の目処は立っていないらしいが、それも何処まで本当か分かったものではない。何故なら、国鉄が本気を出せばどんな障害も回避出来る事を白山は知っている。

去年の夏に土石流で流された信越本線の橋を架け直してくれた技術者達の事を思う。足場も悪く、並行して走る道路がない位の山奥だったにも関わらず、復旧まで半年と掛からなかった。だから彼らの手に掛ければあつという間に線路が出来てしまうのではないか、と思うのだ。もし新幹線が出来たら、はくたかはどうなるのだろう。

「……駄目だ、僕は」

ここ最近ネガティブな思考に囚われがちだと、首を横に振った。今は業務に集中しよう、とパシン、と自分の頬を軽く両手で打った。

走り始めて六年が経った今、白山は毎日三往復の列車を運転し、名実共に北陸と首都圏を結ぶエースとなっていた。

見上げる架線の向こう側

はくたかの廃止が決まった。

上越新幹線の大宮開業に合わせて、上越線を走る特急である「とき」と「はくたか」は廃止となる。ただし、ときはその名を持ったまま、新幹線へと昇進した。真新しい車両と輝かしい未来を手にして。

1

ダイヤ改正の告知は改正当日のおよそ三ヶ月前に行われる。そして、職員には更にその一ヶ月前に告知されるのが普通だ。しかし、内容によっては、それより前に内々で告知されることも少なくはない。

例に漏れず、廃止の件をはくたかに告げた上司は、今回の事を他の特急や関係箇所所周知した方がよいのではないかと打診した。しかし、はくたかは首を横に振り、頑なに周囲への事前周知を拒んだ。

「どうしてだ」

「下手な同情を買うくらいならば、直前まで伏せていただいた方が、こちらとしてもやりやすいので」

「君がそう言うなら無理は言わないが……」

上司は座った椅子をぐるりと回転させて、はくたかに背を向けた。夕日が窓から差し込み、その陰となつて上司の表情は分からない。そのまま次の言葉を待っていると、暫くして、「きつとシヨックを受けるだろうな」と言われ、はくたかは首を傾げた。

「誰がですか？」

「他の特急が、だよ。特に白山は君を慕っていたようだから」

白山、という名前に心臓が跳ねる。と同時に、上司から見ても、白山がはくたかのことと慕っているように見えているのだという危機感を抱いた。二人の関係は誰にも悟られることがないよう、細心の注意を払っていたつもりだったから。

しかし上司はそれ以上言葉を続けることはしなかった。仕方なく、

「そうですね……彼には、私から直接告げようと思つています」

「そうか。それがいいな。私が言うよりも、直接聞いた方が彼も納得するだろうから」

それで話は終わりだった。下がりなさい、と言われたはくたかは、上司の背中に一礼して、部屋を出た。

上司に言ったとおり、はくたかは廃止の件を白山に自分から告げた。そういう約束だったからだ。

しかし、実際に告げられた事実にはショックを受け、泣き出した白山を何とか宥めている内に、すっかり日が暮れてしまった。明かりを点けていない部屋は闇に沈み、白山の姿もぼんやりとしか認識できない程暗くなっていた。

「ねえ、白山」

「……何ですか」

「廃止のこと、まだ誰にも言わないで欲しい。特に雷鳥には……また、何か言い出すと困るから」

「分かっています。でも、エフには言ってもいいですか？ 彼はここにいる他の特急と会うこともないし、約束したことは必ず守ってくれる男です」

「いいよ。エフになら言っても。君もこのことをずっと胸に仕舞っておくのは辛いだろうか……」

白山は頷いて、再びはくたかにもたれ掛かってきた。その身体を受け止めて、ゆっくり背

中を撫でてやる。

「夕食、食べに行ける？」

「僕、きつと目が真つ赤だと思うから行けません」

「でも、お腹空いただろう？ 明日も普通に運転があるんだから、食べないと持たない。何か持つてこよう」

白山の肩に手を添えて、ゆっくりと自分の身体を離そうとした時、白山が突然身体を動かした。それで立ち上がろうと不安定な体勢だったはくたかはバランスを崩し、気が付けば床に倒され白山に組み敷かれていた。

「先輩」

はくたかを見下ろすような体勢になった白山の声は、甘い音を含んでいた。その声を聞いて、まずい、と思つた時には既に自分の唇に白山のそれが重なつていた。止める、と言おうとしたはくたかだったが、白山の目の部分が一瞬きらりと光つたのを見て、口を噤んだ。そして、そのまま二度目の口づけを受け入れた。

触れ合う頬が冷たいのは、白山が流した涙の所為だろう。今日はもう、食事を摂ることは無理だと諦めたはくたかは、顔を近づけている白山の耳元で、いいよ、と囁いた。それを承諾の合図として、白山がはくたかの服を腕がせていく。

そして、露わになつた肩に舌を這わせてきた。むず痒い感触が背筋を駆け上がつていく。

互いの熱を共有する行為に没頭している間は、その事しか考えられないのが今までだった。が、今日はふとしたタイミングで廃止のことが頭を過ぎる。こういう風に白山と過ごせる時間はあと半年しかない。白山には慰めの言葉として「まだ半年」と言ったが、むしろ自分の方が「あと半年」という言葉に囚われている。

ぼたりと垂れてきた水滴は汗か涙か。暗い部屋の中、手探りで快感を探す姿は、ただ現実から逃げているだけのようで、滑稽な事だとはくたかと思つた。